



和泉 雄一 先生

略歴

1979年 東京医科歯科大学歯学部卒業
1983年 東京医科歯科大学大学院歯学研究科修了，歯学博士
1983年 東京医科歯科大学歯学部歯科保存学第2講座 助手
1987年 ジュネーブ大学医学部歯学科 講師
1992年 鹿児島大学歯学部歯科保存学講座（2） 助教授
1999年 鹿児島大学歯学部歯科保存学講座（2） 教授
2007年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯周病学分野 教授
2014年 東京医科歯科大学 副理事
2015年 日本歯周病学会 理事長
2018年 東京医科歯科大学 名誉教授
日本歯周病学会歯周病専門医，指導医，日本歯科保存学会保存治療専門医，指導医

超高齢社会に求められる歯周病予防と治療のベーシック

東京医科歯科大学名誉教授（歯周病学分野）

和泉 雄一

わが国は，世界でも有数の超高齢社会となり，様々な社会問題に直面している。私どもが取り組んでいる歯科治療においては，全身疾患を有する患者さんの割合が増え，日々の診療でも生命の危険と隣り合わせの状態であることが多い。一方で，循環器疾患や糖尿病といったNon-communicable diseases（NCDs）に歯周病原細菌が大きなリスクを持って関わっており，歯周病治療によりNCDの改善が見込まれるとの報告が増加しつつある。国民の大きな関心事が「健康寿命の延伸」であり，それがNCDsの予防と管理を行うことによって実現可能と考えられている現在，歯周病予防と治療に対する期待が寄せられている。

このような状況の中，歯科だけでなく，医科，介護の分野でも口腔の健康管理への関心が高まっており，入院患者さんや在宅介護の患者さんに対して，口腔ケアが積極的に行われている。この口腔ケアは口腔内の細菌数を減少させ，誤嚥性肺炎の予防には効果的であると思われるが，歯周病予防と治療には口腔ケアだけで十分であろうか。近年の研究結果では，動脈硬化病変より歯周病原細菌が検出されたことから，歯周病原細菌の循環器疾患への関与が注目されている。主に歯周ポケット内壁の微少潰瘍面から歯周病原細菌が血液内へ侵入すると考えられており，循環器疾患のリスクを減少するためには単なる口腔ケアを行うだけでは不十分であり，歯周ポケット内の徹底したプラークコントロールが重要である。無論，歯周ポケット内の徹底的なプラークコントロールは菌血症の大きな原因となることから，患者さんの全身状態に応じた注意深い対応が必要である。

歯周炎のリスクは年齢とともに高まるため，高齢者では歯周組織の破壊が起こっていることが多い。このような場合，現状維持を期待して保存的治療を進めるだけでなく，積極的に歯周組織再生治療を行うことによって，より健康な状態に近づけることも重要である。特にアタッチメントロスが大きいときには再生治療により得られる臨床的効果が大きいこともある。患者さんの全身状態，生活習慣，そして健康への意欲など包括的に考えることによって，歯周病予防と治療の計画を立案したい。

超高齢社会を迎えた日本において，歯周病予防と治療の重要性は日に日に高まっている。これらの内容を踏まえて日々の臨床に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 森田学ら，生涯を通じての歯周病対策 ―セルフケア，プロフェッショナルケア，コミュニティケア―，監修：日本歯周病学会健康サポート委員会，日歯周誌，54(4): 352-374, 2012
- 2) 歯周病と全身の健康 JSP Evidence Report on Periodontal Disease and Systemic Health, 2015, 日本歯周病学会編，制作協力 医歯薬出版，2016.
- 3) Periodontics for Special needs Patients. 障害者・有病者の歯周治療，長田豊，和泉雄一監・著，デンタルダイヤモンド社，東京，2017.1.1.